



図2 調査区の北壁写真と断面図



図3 西堀川小路の変遷

びに洪水を引き起こし、大量の土砂を上流から運んで堆積させました。何度かは川の兩岸に杭が打たれて岸の崩壊を止める努力がされたようですが、平安時代中ごろ以降は制御ができなくなって、中世までには約2mにも及ぶ厚さの土砂が溜まって西堀川小路周辺は完全に埋没してしまいました(図3-②)。中世の終わりに洪水の頻度が減って、比較的安定した時期には畑などとして利用されたこともあったようです(図3-③)。

桃山時代 豊臣秀吉が、天正19年(1591)京都の軍事的防衛と洪水対策のために大きく京を取り囲む御土居を築きます。御土居は、北は上賀茂・鷹峯、西は紙屋川から東寺、東は鴨川西岸、南は九条通まで、南北8.5km、東西3.4km、総延長は22.5kmに及んでいたといわれます。

敷地の西半では、深く掘り込まれた御土居堀が見つかりました(図3-④)。深さは約2m、幅は14m以上で、堀の西端は敷地の外に伸びる大規模なものです。この東には本来土塁が高く盛られていた

はずですが、近代に堀を埋めるために平らに削られてしまっていて、わずかに残る土塁基底の一部を確認したにとどまりました(図3-⑤)。

おわりに 平安時代、西堀川小路は左京につくられた堀川小路とともに道路の中央に運河「堀川」を通した特殊な道路として作られました。この紙屋川は、大雨のたびに洪水を繰り返して大量の土砂を運び込む暴れ川でした。当地の周辺をみると、西の西大路太子道一帯に現在も異常な高まりがあることに気がきます。これも同じく紙屋川の洪水堆積によるものと考えられ、その影響は広範囲に広がっていたようです。

平安京の右京は、平安時代中期以降に急激に衰退することがわかっています。今回の調査でわかった洪水堆積の厚さと広がりを見ると、紙屋川の洪水が右京の衰退を早めた原因の一つだといえるかも知れません。そして、桃山時代の洪水対策の一環として造られた御土居が、前代の洪水堆積の上に築かれたことは面白い歴史的現象といえるでしょう。(高橋 潔)